
裏の世界を覆面の下から

蒼比良 智一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏の世界を覆面の下から

【Nコード】

N7572F

【作者名】

蒼比良 智一

【あらすじ】

俺は殺し屋。ちょっと困った事になっちまった……。助けてくれるだろ？これを読んでいるお前は。

俺はウラじゃ名の通った殺し屋。

人は見かけによらない、なーんて言ったのは誰かは知らんが、そいつは俺にヤラレちまった奴かもしれない。

なんせ俺は営業スマイルが得意だからな。『営業中』はいつもニコニコ。誰も死神が笑顔を浮かべるなんて思うまい。

そして白い歯を見せつつ、

バーン

一発さ。

でもある時、見知りの女をシトメル依頼があつた。あの時からかな、覆面なんかで顔を隠すようになったのは。

嘘さ。

こう言つとカッコ良く聞こえるだろ。ふふ。

実際はサツが怖くなっただけ。

我ながらダセーな。笑ってもいいぜ。もうかれこれ十年は自分の笑顔を見ていない。もちろん見た奴もいない。

鏡を見たって目と口の所に穴が開いた覆面を被った俺しか映らね
い。

仕事の時はもちろん、食事の時なんかだって常に警戒してるからコレは外さないようにしている。

そうさ、ビビりさ、なんとでも言え。

どうせお前らも俺を見たら、いや、正しくは俺の使ってる銃かな。こいつを見ると恐れ戦くだろうよ。

ん？ おっと、依頼だ。 なんの用だい？ センスの無いサングラス掛けたおっさん。

「お前に仕事をやる」

なんだこいつは？ 不躰なクライアントだ。 話が急すぎるぜ。 どんだけテンパってんだよ。

「金だ。 受け取れ」

……ま、まあ許してやるよ。

ははは、今夜の風呂は万札風呂らしい。 楽しみだ。

……ああ、聞いている聞いている。 そんな目で見ないで話を続けな。 「ほら、顔写真だ。 俺の部下が言うにはここらで仕事を、勿論ウラの仕事さ、やってたらしいんだがある時神隠しにでもあったかのようにいなくなっちゃった。 アイツにや色々貸しがあるもんでね。 死をもつて清算してもらいたいんだ」

「……おいおいちょっと待て。 何処にいるのかわかんねえのか？」

「だからコレだけ用意したんだ」

客は三つに積まれたアタッシュケースを親指で指しやがった。なるほど、そういう訳か。

いやしかし。

ちょーっと、マズいことに、なっちゃった……ッツ！

「この話、乗った。 あんたの宿怨、晴らしてやるよ」

なんて言ってるけど。

「そうかい、そりゃ助かるぜ！ 一発でシトメテくれよ！」

足が地に着かない。

「そっちの方がスッキリするぜ！　じゃあな！　仕事が終わったら連絡しろよ！」

どうする、俺。

俺は受け取った顔写真を持って鏡の前に立った。

覆面を外す、俺。

久しぶりだな、俺。

ちッ、どうするかな……。

クライアントのターゲットは俺らしい。

俺は考えたね。危急、難局、死地、危地、窮地、一触即発、クライシスな状況を打開する方法を。

考えた結果、おっさんに仕事が終わったと伝える事にした。単純だ。

それがわかればおっさんも胸のつかえが下りるんだろう。きっと。

早速、おっさんを俺の口車に乗せてドライブだ。

顔写真の裏には携帯の番号が書いてあった。

んー。ピッピッと。

「なんだ？」

「もしもし、例の仕事の件だけど」

少し間があった。

俺はひどく興奮した。しかし冷静におっさんを欺いた。

「へえ……早かったじゃねーか。まあ良い。飯でも食いに行かねーか？　気分が良いんだ。奢ってやるぜ」

余りにもスナリ行った。精神一到何事かならざらんってよく言ったもんだ。

しかも飯まで奢ってくれとよ。
悪くない。俺は断らなかった。
さて、準備するか。

*

「おーいこっちだ、弟！ 早く来いよ！」
待つてな、すぐ行く。

「遅かったじゃねーか」

おっさん。

「こっちにも色々あんだよ」

あんたの。

「へえそうかい。 座りな、酒は飲めるかい？」

考えは。

「いいや、遠慮しとく。 虎になっちまうからな、俺は。 酒は
いつも独りって決めてんだ」

とつくに。

「そうかい、残念だな。 じゃあコーラでいいか？ それとも――
――」

読めているッ！

俺は立ち上がって机を蹴飛ばし、腰にさしていたハンドガンの銃口を頭に向けた。

向けるつもりだった。

阻まれた。

俺よりも速く、おっさんは、

「トマトジュースにするか？」

バカデカイピストルを座ったまんまの俺の眉間に当てやがった。

「覆面を外しな。息子よ」

随分懐かしい事言ってくれるじゃねーか。

「俺あ、あんたの息子じゃない」

「死に顔が見てえんだ。さつさと外しな！」

はいはい、わかりましたよ。

この店のマスターらしい人がまたか、といった風に見ている。

店の客は俺らをはやし立てる。

俺は覆面を外すと同時に俺も銃を突きつけた。

「久しぶりだな、親父」

「覚悟してきたんだな」

「いつから俺って気づいてた」

「最初からさ。既に情報は掴んでた」

「じゃあなんであの時手を出さなかったんだ」

「親父としての最後の情けさ。あの金はどうした？」

「あの金って全部二セモンだったじゃねーか」

「人生そんなものだとかえたかったんだ。親として、出来ることは済ませた。死ね」

「あんたはまだ子に愛情を注いでないぜ？」

「愛情ならお前が殺した、俺の愛する娘に溢れるくらい注いださ」

「俺には？」

「偽物の金をよこしただろう」

「そんな偽りの愛はお断りだね」

俺はこの言葉を最後に引き金を引いた。完全な不意打ちだった。

親父をシトメタ。

あつけなく死んだ親父と店を出て家へ戻った。

店からは歓声が聞こえた。

家に着いた俺は、死んだ親父を床に寝かせた。

俺は親父を思い出してみた。が、思い出せなかった。

昔から親父は姉のことしか見なかった。俺なんかはいなくて良かった。実際、さつき死ねって言われたし。

悲しくなった。

親父が死んだからじゃない。親父が最期まで俺を殺したいと思っていたから。

俺は親父に認められたかった。

しかし、その機会を自ら葬った俺だから思う事がある。

こんな世の中、生きてる価値、ゼロだ。

いつもの笑顔を浮かべる事は出来なかった。

バーン

一発だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7572f/>

裏の世界を覆面の下から

2010年12月9日14時56分発行